

東京女子師範学校保姆練習科第1回卒業生たちのゆくえ

立浪澄子

(富山女子短期大学)

1、研究の動機と課題

最近の顕著な少子化傾向に象徴される現代社会のさまざまな変化、たとえば都市化・情報化・国際化などは、あらゆる階層に、そのライフサイクルの変化や価値観の改変をもたらしつつある。そこでは当然保育制度も見直しの対象とならざるをえず、米国やEC諸国のみならず日本においても、乳幼児の保育が重要な社会政策の一環として、焦眉の政策課題となりつつある。しかし最近の経緯をみれば、制度リニューアルの必要性は共通に認識されても、その船首をどちらに向けるかについては、必ずしも一致しているとはいえない。なぜなら、問題は個人の利害や価値観を超えて、現行制度とその社会的基盤との間に潜む不合理、矛盾にこそあるからであり、時代にふさわしい新しい子育てビジョンの総意は未だ形成の途上にあるからである。

新しい保育制度はその利用者の意識改革とともに、政策担当者、制度運用者の意識改革をも同時に進めていかなければならない。そこに必要なのは歴史感覚であり、問題の根源を歴史的な視野から正確につかむことである。保育者養成は今この問題を切実に抱えており、根本的な見直しを必要としているといっても過言ではないだろう。

このような課題意識に立って一昨年来、保育者養成史の共同研究(代表岩崎次男)の一端を進めてきた。この間、日本における保育者養成史の年表と文献リストを作成する過程で、本格的な保育者養成史の研究がきわめて少なく、体系的な研究方法論も未成立であることを痛感した。したがってまだ周到な研究計画にのっとりたものとはいえないが、まずは日本で最初の保育者養成機関、東京女子師範学校保姆練習科の設置の意義とその影響について研究を進めていきたいと考えている。今回はその一環として、卒業生の足取りの一部を報告し、そこから草創期の保育者養成の結実の一端をあきらかにしたい。

2、東京女子師範学校保姆練習科の卒業生たち

東京女子師範学校保姆練習科は1878(明治11)年6月27日、東京女子師範学校(現お茶の水女子大学)内に設置された。これが当時の同校附属幼稚園監事関信三の開陳する稟申書に基づくものとは、『一色町誌』(愛知県一色町編、1970)に述べる関信三伝の伝える

ところであるが、現物は確認されていない。

しかし『文部省第六年報』(1878)によれば、この保姆練習科は当初僅か「一兩名」の志願者しか集まらず、10月31日新たに給費規則を定め、給費生5名自費生6名の計11名の入学者をもって翌1879(明治12)年2月発足、1880(明治13)年7月廃止された。正式には僅か1回の卒業生を送りだしたただけであった。突然廃止された原因についてはあまり言及したものが無い。思うに、このころは前年公布されたばかりの、いわゆる自由教育令の評判がかんばしくなかった。儒教主義が復活の兆しを見せ、幼稚園教育の推進者だった文部大輔田中不二磨が3月更迭されたことも響いていると思われる。

このときの卒業生の名は『日本幼稚園史』(倉橋惣三・新庄よしこ著1825)によって知り得るが、ここではさらにくわしく『昭和31年・みどり会名簿』(注、同窓会名簿)によって見てみることにしよう。

「明治13年7月修了 十一人

田中良(旧姓原田)(注、住所の記入なし)

(相原春、勝山貞、福田布久、前原鉄、永野桂、武藤八千代、山田千代、小林利、橋本嘉治)

退(長竹国)」(注、かつこ内は物故者)

相原春と橋本嘉治(旧姓大津、文久二年生まれ)は仙台出身、仙台師範学校女子部卒の小学校訓導で、県より派遣されての入学であった。橋本は卒業後、仙台区木町通小学校附属幼稚園(現、仙台市立東二番丁幼稚園)保姆として、1932(昭和7)年3月まで52年間在職した。1943(昭和18)年没。クリスチャンで長男寛敏は聖路加国際病院長を務めた。相原は橋本と同じく卒業後木町通小学校附属幼稚園保姆となったが、その後の消息は現在のところ不明である。

福田布久は1861(文久元年)生まれ?東京に育つ。東京女子師範学校開校と同時に入学。小学師範科修了後引き続き保姆練習科入学、卒業後は東京における最初の公立幼稚園、江東(えびがし)小学校(現墨田区立両国小学校)附属幼稚園の初代保姆となった。以後ずっと幼稚園・小学校教育に携わったらしく、1898(明治31)年より発行の『婦人と子ども』誌にはフレール会員として名を連ねている。

山田千代は1851(嘉永四)年、旗本の娘として江戸

に生まれ、保姆練習科を卒業後、一時高知県立女子師範学校に赴任したが、2年後帰京。1886（明治19）年5月、私立小石川幼稚園を小日向水道端日輪寺境内に開いた。開園には伊沢修二の援助があったという。山田は生涯を幼稚園経営に捧げ、1913（大正2）年没。

小林利は詳細はわからないが、1933（昭和8）年、『幼児の教育』第33巻2号に関信三の思い出を載せている。それによると関と教え子との間にはわずか8ヶ月前後（関は11月に病没）の交流にもかかわらず、深い師弟の結び付きができていたことが伺われる。恩物を模した彼の墓が彼女らの手によって建てられたことも、この記事によって知られるようになった。

長竹国は1860（万延元）年江戸、神田に生まれる。1881（明治14）年9月、前年開園したばかりの大阪愛珠幼稚園の首座保姆として赴任、1885年まで在職した。

勝山貞、前原鉄、永野桂（『日本幼稚園史』では松本桂）、武藤八千代については現在のところなんら手がかりはない。

3、原田良の前半生

原田良も、最も長命ながら、これまでほとんど知られてこなかった卒業生のひとりである。小林恵子氏の研究によって、フェリス女学院の初期の生徒の一人であったこと、保姆練習科卒業の後は横浜のブリテン女学校（現、成美学園）附属幼稚園の保姆になったことがあきらかになっている。今回筆者は成美学園高校教諭小宮まゆみ氏の協力を得て、現在知りうる原田良の前半生について調査を行ったので報告する。

- 1870（明治3） 9月、M・E・キダー（注、フェリス女学院創立者）がヘボン塾（注、ヘボン夫人が1863年始めた塾）で教え始めた際、田舎より戻ってキダーに学ぶ。
- 1875（明治8） 一時期、東京に出て官立女学校（注、東京女学校か？）に学ぶ。10月再びフェリス女学校に戻り、助手となる。
- 1876（明治9） 5月受洗。このころオルガンを学ぶ。
- 1878（明治11） 東京に転居。私立学校で教える。麴町教会（現、高輪教会）に所属。
- 1879（明治12） 2月、東京女子師範学校保姆練習科入学
- 1880（明治13） 7月、同科卒業。10月、ブリテン女学校開校、J・H・バラの紹介でミス・ブリテンの通訳兼助手となる。幼稚園保姆も兼務
- 1882（明治15） ブリテン女学校退職？
- 1887（明治20） 東京府牛込区立赤城小学校附属幼稚

※35歳前後 室に勤務？
1888（明治21） 月俸九円となる？
？ 田中に改姓

以上が現在つかんでいる原田良に関する消息である。これによれば、良はかなり早い時期、おそらくはキダーと出会う1870（明治3）年以前から、クララ・ヘボン（注、宣教師J・C・ヘボンの妻）に学び、その後キダーに学んだらしい。フェリス女学院が自前の校舎を新築した1875年6月以後はキダーの助手の一人として働いた。島田嘉志子（後の若松賤子）と共に、キダーの最も古い生徒の一人といえる。

注目すべきは良がすでに保姆練習科入学以前、相当な英語力に加えて、音楽をも身につけていたことである。しかもすでに入信しており、松野クララの英語による講義はもちろん、フレーベル伝に基づく幼稚園保育法の講義にもさほど違和感を持たなかったのではないだろうか。

ブリテン女学校での勤務が長続きしなかった理由は不明である。東京にいたらしい家族との関連が考えられないでもない。

ともかくその後の消息は今日まで何も知られていなかった。しかし筆者が1993年東京都公文書館で調査した史料の中に、良のものと思われる1通の書類が見つかった。それは明治21年牛込区長から府知事宛に提出された「赤城小学校附属幼稚室保姆原田りやう」の月俸を八円から九円に昇給するという上申書である。

（分類番号616-A7-6「明治21年公立小学校教員任免開申録」）これによれば、良は1887（明治20）年4月開設の牛込区立赤城小学校附属幼稚室の保姆となったらしい。この保育室は新宿区では最も古い幼稚園であったが、1893（明治26）年4月廃止された。理由はわかっていない。保育内容は当時の他の幼稚園と同じく東京女子師範学校附属幼稚園を模したものであった。

原田良は当時としては稀有な英学による教育を受け、しかも当時、時代の先端であった幼稚園教育に携わってきた女性である。世間の論調はこのような女性に対し時には非常に侮蔑的なものもあった。このような時代に良はどのような後半生を生きたのか、さらに史料の探索を続けていきたい。

参考文献

- ・川島保良著「明治一大正期・草の根の有識婦人像（その2）幼稚園保姆 橋本よしじ」『女性文化研究所紀要』第6号、昭和女子大学、1990
- ・フェリス女学院『ふえりすー一中学校・高等学校紀要一』第2号、1978、その他